

國學院大學学術情報リポジトリ

小学校外国語教育における絵本の活用： 指導者が選ぶ英語絵本

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長田, 恵理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001361

小学校外国語教育における絵本の活用

—指導者が選ぶ英語絵本—

長田 恵理

【要旨】

本研究は、小学校外国語教育に比較的長く関わっている英語指導者に質問紙調査を行い、どのような絵本をどのような観点で選んでいるのかを調べるとともに、選ばれた絵本がどのような特徴を持っているのかを内容面、言語面から分析した。8名の指導者から10冊ずつの絵本を選んでもらった結果、必ずしもこれまで定番と思われていたタイトルばかりではなく、合計62タイトルが挙げられ、言語的に学習に適したものだけでなく、物語から自分を見つめるなど深い学びへとつなげる活動を想定しての選本も多くみられた。場面や目的に合った言語使用を子供たちに身に付けさせるためには様々な場面を与えることが必要であるが、教室内でできることには限界があり、疑似的ではあれ、バリエーションのある場面を提供し、言語使用場面を経験させるという意味でも今後、絵本の活用の可能性が広がるものと考えられる。

【キーワード】

小学校英語教育 外国語活動 外国語科 絵本の活用

1. はじめに

2011年に必修となった小学校5、6年生の外国語活動は領域であって教科ではないため、教科書はなく、主に文部科学省が配布する教材『Hi, friends!』を使用して行われてきた。2017年3月末に2020年からの教育課程が学習指導要領で示され、小学校では3、4年生が週1時間の外国語活動、5、6年生は週2時間の教科としての外国語科の授業が行われる。これに先駆け、文部科学省は2016年、3、4年生向けに使用される2つのオリジナル絵本教材を電子教材として提示している。『Hi, friends! 2 指導編』（文部科学省、2012）において「コミュニケーションは、『話す』ことというより、相手の話を『聞く』ことから始まる。聞いて相手の話していることがわかる体験をたくさん児童にさせることが大切である。そこで、児童に聞かせる工夫の1つとして、絵本の読み聞かせが考えられる。」とあり、さらに「選ぶ絵本の内容によって、現実には起こり得ないことを絵本の世界で体験することもできる」とも書かれていることから、第二言語習得において重要とされているインプットの量を確保する手段の一つとして、かつ、文脈の中で言語に触れる機会を与える教材として、絵本を位置付けていることがわかる。

これまでの外国語活動は「聞く」「話す」が中心で、「読む」「書く」に関してはアルファベットの認識にとどまっており、この枠組みの中での絵本の活用は読むためのものではなく音声で読

み聞かせるためのものである。しかし、2020年に完全施行される新しい学習指導要領（文部科学省, 2017a）では5, 6年生においては「聞く」「話す（やりとり）」「話す（発表）」「読む」「書く」の5領域それぞれに目標があり、さらに「読む」素材である絵本の活用の可能性が広がるものと考えられる。そこで、本研究は、小学校外国語教育に比較的長く関わっている英語指導者に質問紙調査を行い、どのような絵本をどのような観点で選んでいるのかを調べるとともに、選ばれた絵本がどのような特徴を持っているのかを内容面、言語面から分析した。

2. 先行研究

絵本の活用についての先行研究は実践報告が中心である。松浦・伊東（2012）は、第二言語習得理論、Krashenのインプット仮説を理論的枠組みに、絵本が小学校外国語活動において良質なインプットを与える教材と仮定し、児童に11冊の英語絵本の読み聞かせをしたうえで、理解力、聞こうとする態度・意欲、興味関心について小テストとアンケートを用いて調査した。本は「繰り返しが多いもの」「リズムが美しいもの」「ストーリーが簡潔であるもの」「絵と言葉がマッチしているもの」を基準に選定された。結果、児童の理解力、聞こうとする態度・意欲、興味関心それぞれの項目について回を重ねるにつれて向上が見られた。また、好きな絵本の上位3作はすべて、教材用に作られたものではない絵本であったことから、子供はオーセンティックなものをより好むと結論付けている。又野（2014）は中学校の教員として、小学校6年生の教室へ訪問授業に行き、小中連携を意識して絵本を用いた授業を行った実践の報告をしている。子供たちにもなじみのある「はらぺこあおむし（The Very Hungry Caterpillar）」（Eric Carle作）を選び、絵本を通して、語句・表現に慣れ親しむだけでなく、あおむしから蝶への成長も扱い、What fruit do you like? などの表現を実際に使って先生や友達の好きなものを尋ねるなど、実際の言語活動と同様の意味のあるやり取りにつなげた。指導者が中学校教員であることから、児童からは中学校の授業が楽しみになったという意見が見られた。さらに、大川（2015）は、小学校英語教育に絵本を補助教材として導入することの効果を検証するために、低・中・高学年にそれぞれ発達段階に合うと考えられる絵本を1冊ずつ用いるような授業を、1週間に15分×4回行った。結果、特に中学年で情意面での効果が見られたが、高学年では期待されたような効果は見られなかった。一方、聴解に関しては全学年において向上が見られたことから、絵本を使用することの効果は見られると結論付けたいうえで、特に高学年においては、丁寧な指導の上で絵本を読ませるなど適切な手立てが必要であると述べている。松本（2015）は前述の松浦・伊東（2012）が枠組みとして用いたインプット仮説だけでなく、アウトプット仮説、インタラクション仮説、さらには村野井（2006）の「関連性」「真正性」「音声と文字のインプットであること」を理論的根拠として絵本活用は第二言語習得の手立てとして適切であるととらえ、大学生が6～8歳の児童に対して一回45分でBrown Bear, Brown Bear, What Do You See?を題材に授業を行った際の授業観察を行い、児童の様子と読み手の技術、題材の特徴について考察した。結果、子供たちは英語での鳴き声だ

けでなく、「Purple catだ」などという反応も見られたが、これらは読み手の技量によるもので、(1) 絵本の文を暗記して自分の言葉として読み聞かせる、(2) 子どものペースに合わせ、一体になって読む、(3) 児童の反応を広いながら読み進める、などの工夫が大切だと結論付けている。また、題材については、繰り返しの部分“what do you see”と「動物の色＋名前」の変化する部分があり、それらがリズムよく読めることで子供の記憶に残りやすいことや、絵本の中の問いかけが聞き手である子供たちへの問いかけともなり、言語習得のためのインプットの真正性が満たされていることから教材として適していると分析している。

母語教育において読み聞かせは言語を発達させるのに役に立つことが確認されているが、杉本・湯川・森（2010）では、先に湯川・高梨・小山（2009）が行った研究で英語専科教員が少人数（4～6名）を相手に英語絵本の読み聞かせをしたところテキスト能力が向上したことを受けて、小学校の学級担任が教室でクラス全体に英語絵本を読み聞かせることによっても児童のテキスト能力が向上するかを調査した。その結果、英語が専門ではない学級担任の読み聞かせでもテキスト能力向上に貢献していることが分かった。また、この調査では学級担任16名に意識調査も行っているが、英語の絵本を読むことに大きな抵抗感はなく、むしろ読み聞かせをするための絵本を用意・確保することに困難を感じているという結果が出ている。

絵本の選択について研究している数少ない例の一つが山崎（2009）である。「絵本を活用した国際理解教育のための教材開発研究(CCUP)」により内容面では(1)accurate representation of the culture, gender, roles, (2)interesting and age-appropriateness, (3)politically correct, (4) content relevant, (5)message, moral, values, 言語面では(1)text, (2)repeated language, predictable language/pattern, イラスト面では(1)quality of illustration, (2)accurate representation of the culture, gender, roles, 最後にフォーマット面ではlayoutを選定規準として民族の多様性を重視した15冊を選定し、実際に小学校現場で教員に使用してもらった使用状況を分析している。山崎は使用状況結果から多くの担任に選ばれた上位2冊の絵本（Rosemary Wells作『Yoko』とDon Freeman作『Corduroy's Best Halloween Ever』）に注目し、話題や登場人物の設定が子供たちを引き付けるものであり、テーマが理解しやすいものといった子供側の要因に加えて、その絵本を基にどのような授業が構想できるかという教師側の要因も選択の根拠になりえると述べている。

全く別の視点で絵本の分析をしているのが名畑目（2017）の研究である。単語や文が表す概念間の意味的な関連度をコーパスと統計分析に基づいて算出する手法である潜在意味解析（LSA）によって評価される「意味的な関連度」が、絵本など小学生向けの英語教材の特徴を表す指標の1つとして利用され得る可能性を論じている。ホールランゲージアプローチの考え方に基づく「意味のある文脈」として絵本は適切な素材と考え、そうであるならばテキストが難しくなるほどに低くなるとされている「意味の関連度」が、小学生向けの物語素材では高くなるのではないかと仮定した。研究対象を『Hi, friends!』の物語素材「桃太郎」としてLSAで分析した結果、意味の関連度は準2級レベルと同等であり、初級者向けの値ではなかった。名畑目はその理由として、

桃太郎のテキストがかなり簡素化単純化されているために語同士の関連度が高くなかったのではないかと考察している。意味の関連度が低くても絵や読み手の読み方によって内容の一貫性を保つことができるため、LSAによる分析は絵本教材の開発・改善に役立つほか、絵本教材を使用する際、教師がどのような英語語彙を用いて語りかけをすれば意味が伝わりやすくなるのかを考えるためにも有効であると述べている。

また、脇本(2017)はEgan(2005)の提唱する想像力を触発する教育法(Imaginative Approach)における認知的道具(Cognitive tools : CTs)を活かすことができる教材として、児童英語教育における英語絵本の有用性を明らかにすることを試みている。脇本は児童英語教育では音声が中心であることから、これに見合ったCTsとして、ストーリー (story), 比喩 (metaphor), 対概念 (binary opposites), 韻・リズム・パターン (rhyme, rhythm and pattern), 冗談とユーモア (joke and humor), イメージ (mental imagery), ごっこ遊び (play), 謎 (mystery), 生きた知識 (living knowledge), 模倣と動き (mimesis and movement) を取り上げ(訳語はすべて脇本(2017)による), 絵本の中にどのように埋め込まれているかを分析した結果, 例えばLeo Leonniの“Swimmy”やEric Hillの“Where’s Spot?”には対概念CTが, Dr. Suessの“The Cat in the Hat, Hop on Pop”, Bill Martin Jr.の“Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?”, Laura Vaccaro Seeger の “Lemons Are Not Red”などには韻・リズム・パターンCTが埋め込まれており, “Shark in the Park” (Nick Sharratt作) には対概念CTのほか, 冗談とユーモア CT や韻・パターン CT が含まれると分析している。

名畑目(2017)も指摘しているが、これまでのところ絵本の活用についての研究は実践報告が中心で絵本素材の分析をした研究は多くない。また、松浦・伊東(2012)は子供の絵本し好に言及しているが、指導者側の選択について研究したものもほとんどない。そこで、本研究では比較的指導経験が長い指導者に対して小学校外国語教育に適すると思われる絵本とその理由について探索的に調査するとともに、挙げられた絵本素材の特徴の分析を試みる。このことによって、少ない予算で「まず選ぶべき本はどれか」と迷っている小学校に示唆を与えることができるのではないかと考えた。

3. 研究

3.1 研究課題

本研究の研究課題を以下のように設定する。

- (1) 小学校3～6年生に適する絵本とはどのようなものか。
- (2) 適していると考ええる理由はなにか。

先行研究の実践報告でも頻繁に取り上げられている“Brown Bear, Brown Bear, What Do You

See?”や“The Very Hungry Caterpillar”などは定番中の定番であり、(1)の結果としても多くの回答者が挙げてくるのではないかと仮説をたてた。また、(2)の理由としては山崎（2009）の結果にもあるように、子供の興味関心を引き、わかりやすいという子供側の要因と、絵本内容をいかに発展させて授業を組み立てられるかという教師側の要因の両方が見られるのではないかと予測する。

3.2 研究方法

研究協力者は首都圏及び関西の国公私立小学校外国語教育に従事した経験のある指導者8人で、全員が女性である。2017年8月にメールで質問紙を配布し、回収した。また、追加で今までの英語指導経験の正確な年数と絵本を使用する理由についても尋ねた。推薦する絵本については、小学校3～6年生の外国語教育で活用できると考えられる絵本を最大10点まで挙げたうえで、対象としてふさわしい学年と活用できると考える理由を記入するよう依頼した。杉本ほか（2010）の結果にあるように、小学校現場では欲しい英語絵本を欲しいだけ購入できるわけではない。10点と限定することでより必要性が高いものを選定できるのではないかと考えた。研究協力者はいずれもベテランの指導者であり、依頼の際に10点のみを選ぶのは難しいという意見もあったが上記のような理由から、10点を上限とした。

3.3 結果と考察

3.3.1 英語指導経験と絵本を活用する理由

表1は研究協力者の英語指導歴を場所別に表したものである。8名全員が小学校での指導歴が10年以上あるほか、長年にわたって絵本を使用して指導していることがわかる。

表1 研究協力者の英語指導歴（数字は年）

	A	B	C	D	E	F	G	H
幼稚園	3		8					5
小学校	15	12	11	10	13	12	11	14
公民館などの公共施設	9	1		5		1	11	1
児童英語教室	20	20	10	20	19	12	22	7
その他	高校4 大学4	中学5	大学7 専門学校10			家庭 教師3	私立 中学7	保育園5
絵本を使っ ての指導 歴	20	10	17	20	17	12	22	15

また、絵本を使う理由としては以下のような意見が挙げられた（表2）。

表2 英語指導に絵本を使う理由

A	言語習得のツールとして外せない教材だと考えているためである。whole languageの視点からも有効な教材となる。また、幼児には言語習得以外の人間教育にも道徳教育にも異文化理解教育にも、教育全般に使用可能であるから。
B	理由はたくさんあるが、①子供の発達段階を考慮すると、幼年期には絵本を読み聞かせることで、思いやりの心・道徳心・差別・違いなど様々な事を、教えるのではなくて感じてもらえる、②単純に「絵本はたのしい」、③絵本を読んであげること、読み手と聞き手の間に温かい関係が生まれる、④絵本をたくさん読んでもらった子は心が豊かになるという点が挙げられる。また、願わくば自分から進んで読み初めてもらいたいという指導者としての気持ちもある。
C	①テーマベースの単元の導入または発展材料として有効に使える、②リズムを大切に読み方で、英語ならではのイントネーションを体感させることができる、③ストーリー性のある内容では文化や主人公の心情に触れさせることができる、④様々なインタラクションを起こすことができる、⑤文法的な気づきを自然に促すことができる。
D	①異文化理解、②英語のプロソディを育てる、③絵本によっては、子どもたちの身近な世界で自然に英語に触れる事ができる、④子どもたちの興味、関心も他の教材より高い、という点。
E	単語、単語、ではなく、自然な文脈で英語に触れることが出来る。また、英語がわからなくても絵（視覚）から内容を推測することができる。絵本を通して、例えば、同じ動物でも、外国で描かれたものと日本で描かれたものではイメージが違っていたりすることも多々あり、絵本を通して、異文化に触れる機会も少なからず得られることから、絵本の使用は大変有効であると考えられる。
F	①想像力、異文化間理解力を育められる、②トップダウンでのインプットを行えると思う、③パターンがある絵本に関しては、論理的アウトプットを行うのに役立つ、と思うから。自分自身が絵本が好きだということも理由である。
G	①英語という言葉が、絵本の中の、子どもたちに身近なシチュエーションで意味を持って使われていることを分かりやすく示している、②意識する・しないに関わらず、英語の単語や文章を自然と目で見ながら、指導者の英語の音を耳で聴き、さらに絵の描写を見ることで英語体験を実感できる、③現代の作品においては、用いられている英語の表現が自然で、実際に使われている英文である、④取り上げられるテーマが子どもたちに身近であり、かつ、人間として学ぶべき内容が多い、⑤登場する人物などの感情や状況を想像し、共感したり、反発したり、子どもたち自身の感情や反応を引き起こす、⑥指導者がめくるページのその先にどんな世界や事件が広がって行くのか、想像力や予測力を自然と養う、の6点。
H	絵本を使う理由は多岐にわたるが、①絵やイラストが手助けとなり、英語を見聞きして「わかった」体験ができ、それが自信につながる、②絵本の世界は本物の世界であり、リアルな場面設定ができる、③絵本は様々なテーマや文化などの背景を持つため、絵本を通して異文化への理解や興味関心を高めることが出来る、の3点が特に重要である。

3.3.2 作品タイトル

8名それぞれが10点ずつ記入していたが、単体のタイトルではなくシリーズもののタイトル（Oxford Reading Tree）が記入されていた1点を除いて79点を有効データとした。作品別では計62種類のタイトルが示された。8名中3名が選んだタイトルが①“Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?”（文：Bill Martin, Jr. 絵：Eric Carle）、②“Ketchup on Your Cornflakes”（Nick Sharratt作）、③“The Very Hungry Caterpillar”（Eric Carle作）、④“Today is Monday”（Eric Carle）、⑤“What Can You Do?”（Mikiko Nakamoto作）の5作である。また、2名が選んだタイトルは、⑥“Five Little Monkeys Jumping on the Bed”、⑦“Go Away, Big Green Monster”、⑧“No, David”、⑨“Seven Blind Mice”、⑩“The Doorbell Rang”、⑪“Tomorrow’s Alphabet”、そして⑫“Yo! Yes?”であった。筆者はかつて小学校で英語（外国語）活動の指導をしており、自身も英語絵本を相当数活用していた経験から、特に定番と言われるものはもっと多くの重複があるものとの仮説を立てていた。したがって、実に62種類の作品が挙げられたことは予想外であった。紙幅の都合上、62作すべてについて検討することは困難であるため、本節ではこれら12の作品について、それぞれ語数と使用されている語彙のレベルを計算した（表3）。

表3 複数名が選んだ作品の語数・語彙レベル

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
語数		199	84	228	83	189	200	89	63	275	297	187	35
語彙レベル（%）	1000	92.5	79.8	82.0	24.1	90.0	90.0	82.0	69.8	78.9	71.0	53.5	80.0
	2000	2.0	3.6	2.2	14.5	2.7		2.3	4.8	9.1	2.4	4.8	
	3000	2.0	3.6	2.6	13.3	1.6	0.5	1.1		3.3	1.0	3.2	
	4000	2.0	2.4	0.9		4.2	4.0	2.3	1.6	1.8	4.4	2.7	2.9
	5000		1.2	4.0	34.9				15.9	2.6	6.4	0.5	5.7
	6000			0.4									2.9
	11000		2.4	0.9			3.5			0.7		4.3	
	17000	1.0	2.4	4.0		1.1		5.6	1.6	0.4	9.4	2.7	
	21000			0.4		0.5							
	30000		2.4	0.9	7.2			2.3		0.4	0.3	0.5	
	不明	0.5	2.4	1.8	6.0		2.0	4.5	6.4	2.9	5.1	27.8	8.6
平均語彙レベル		1.3	2.5	2.3	4.8	1.5	1.5	2.6	1.9	1.5	3.0	1.9	1.4

語彙レベルのチェックは英文語彙難易度解析プログラムWord Level Checker（WLC）（http://someya-net.com/wlc/index_J.html）（Someya, 2006）を用いた。語彙リストはWLC（Ver.0.2）

（染谷, 1998）を使用した。この語彙リストでは固有名詞がレベル5（5000語レベル）に指定されているため、名前や曜日が含まれている場合には平均語彙レベルが高くなる傾向にある。そのため、登場人物が多い“The Doorbell Rang”や曜日が何度も出てくる“Today is Monday”は他の作品に比べて平均語彙レベルがやや高くなっている。これらを除けば、全体として1.3～2.6、つまり1000～2000語レベルに収まっていると言える。「不明」に分類されている語はベース辞書にないもので、縮約形のIや’veなどが含まれる。

語数は最も少ないもので“Yo! Yes?”の35語であり、最も多いもので“The Doorbell Rang”の297語である（いずれもタイトルを含む）。児童とやり取りする時間を考慮に入れず、ただ読み聞かせをする場合、5分以内に終わるような量である。量の多少はあれ、特に①～⑤の絵本はどれも繰り返しがあり、文まるごとが同じ表現ではなくともチャンク（かたまり）として何度も触れるうちに子供たちも一緒に言うことができ、読んでいるつもりになることができる可能性がある。

次に内容についてであるが、12冊のうち、“Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?” “The Very Hungry Caterpillar” “Today is Monday” “Five Little Monkeys Jumping on the Bed” “Seven Blind Mice”の5作は動物が主人公である一方、“No, David”, “The Doorbell Rang” “Yo! Yes?”は人が主人公である。“What Can You Do?”は、英語教材として作られた絵本である。動物の特徴が描かれているが、オーセンティックな絵本に比べて英語表現（ここではcanを用いた表現）に重点が置かれ、ストーリー性が弱い。「できること」の表現から最後は自己肯定感を促すように、子供たちのできることに焦点を移す流れになっている。また、“Go Away, Big Green Monster”はタイトル通りの怪物（Monster）が主人公のお話で、小学校外国語活動においてはHalloweenの時期に特によく使われる定番絵本である。“Ketchup on Your Cornflakes”は上下が切り離されている仕掛け絵本で、読者への問いかけが続き、ストーリーではなく、それぞれのページを楽しむ形式になっている。同様に、“Tomorrow’s Alphabet”も26のアルファベットをモチーフに綴られるが、見開き2ページで完結しており、ストーリーではない絵本である。

3.3.3 作者

複数名が作者である場合をひとまとめにしても、挙げられた作品は47の作者に渡った。中でも多かったのはEric Carleであり、前節にある3作に加えて、“Hello, Red Fox”, “Mixed up Chameleon”, “Polar Bear, Polar Bear, what do you hear?”, “Slowly, Slowly, Slowly, said the Sloth”, “From Head to Toe”, “The Secret Birthday Message”と計9タイトル延べ15冊を占めていた。Eric Carleの作品の中でも特に動物が主人公になっているものは外国語教育で人気が高い。タイトルからすぐに動物が主人公とわかるものもあるが、“From Head to Toe”も動物と人間が動作でやり取りをしている作品である。どの作品も色が豊富であり、中学年から高学年にかけて英語を学び始めた児童が聞いてわかる語彙を用いてやり取りをすることが可能であり、実際に回答者の対象学年も「3～6年生のどの学年でも」と書かれていることが多かった。また、

Mikiko Nakamotoの作品も 前述の“What Can You Do?” 以外に “A Teddy Bear”, “Our Sweet Home”, “What's this?”が挙げられている。これらはすべて、英語学習の補助教材として作られているもので、指導したい語彙や文構造がしっかり組み込まれており、例えば “Our Sweet Home”には様々な前置詞が物語の中で学べるようになっていいる。実際、3名が選んでいる“What Can You Do?”について回答者の一人は「使い勝手が良い」と答えている。このほか、複数のタイトルが挙げられていたものにはNick Sharrattの “Ketchup on your cornflakes” と“A Cheese and tomato spider”, Nancy Carlsonの “I like me” と“Life is fun”, David Shannonの “No, David!” と“David goes to school”, そしてDr. Seussの “In a People House”と “The Hat in the Cat / Hop on pop”があった。

3.3.4 選定理由

本節では、テキストマイニングのフリーソフトウェアであるKH Coder（樋口, 2014）を用いて共起ネットワーク図を作成し、協力者の指導歴や絵本を使用する意図を照らし合わせながら選択理由を探る。抽出語は2回以上出現するものに限定した。

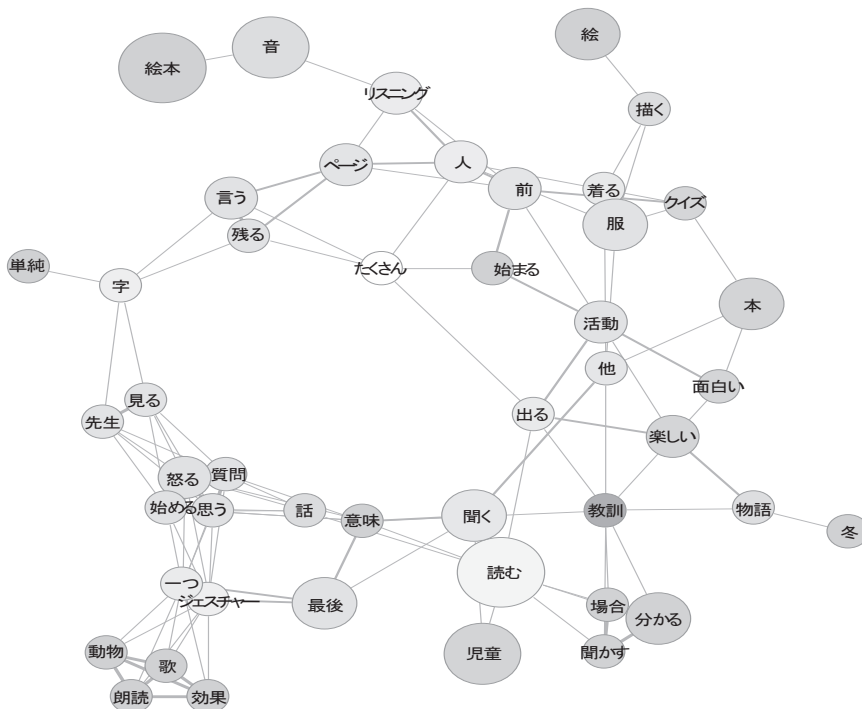


図1 Aさんのコメント

Aさんは10冊のうち、半分の5冊を文字がない絵本も含めてストーリー性の高いものを選び、

残りの半分は語彙や文構造、音韻認識など言語的な学習ができるものを挙げていた。図1からAさんは10冊の異なる本であっても一貫した絵本の使い方があり、読み聞かせるという行為が中心になって、語彙だけでなく人の感情なども話題にしながら活動を行っていることが読み取れる。児童英語教師として20年間、また大学院でも英語教育について研究をしたAさんは、絵本を言語習得のツールとして外せない教材だと考え、whole languageの視点からも有効な教材となると考えている（表2）。加えて、幼稚園での指導経験もあるAさんは、言語習得だけでなく、人間教育・道徳教育・異文化理解教育といった教育全般に使用可能なものと捉えており、そのことが図中の「教訓」のほか、「楽しい」「面白い」「怒る」などの感情を表すキーワードにつながっていると考えられる。

Bさんは小学校での英語指導を経て、現在中学校で英語講師をしている。選書の理由には「みんなで」というキーワードが複数回出てくる（図2）。絵本の効果について、「幼年期には絵本を読み聞かせることで、思いやりの心・道徳心・差別・違いなど様々な事を感じてもらえる。」と考えていることが、ネットワークの「みんなで」「楽しく」というキーワードにつながっていると考えられる。現在、読み書きの比重が大きくなる中学校の英語を指導する立場にあることも関係していると推測されるが、教員が絵本を使用することによって、願わくば自分から進んで読みはじめてもらいたいという小中連携に通じる思いも表れていた（表2）。

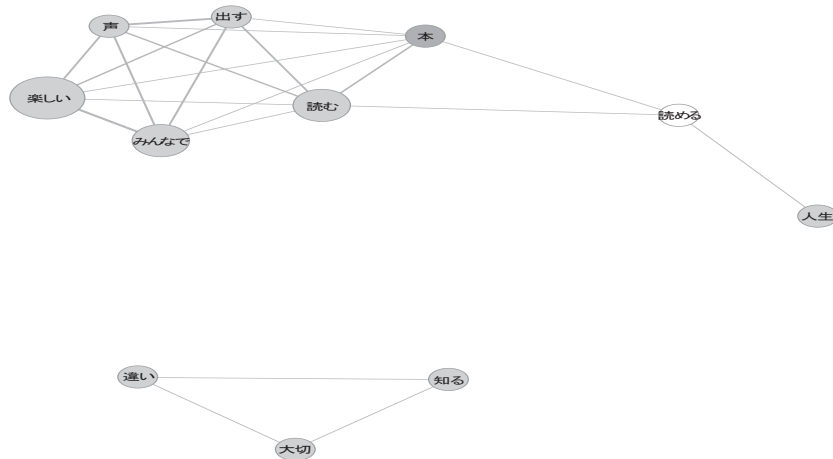


図2 Bさんのコメント

私立小学校で英語の指導をするCさんはContent-based Instructionで英語の授業を構成していることも多く、絵本を用いた指導について「テーマベースの単元の導入または発展材料として有効に使える」からと回答している通り、「色」や「動物」といったテーマを選び、児童に「考え」させ、発展的な活動に導こうとしていることが読み取れる（図3）。また、絵本の使用は「文法的な気付きを自然に促すことができる」とも述べていて、そのことが「前置詞」などといったキー

ワードに反映されており、言語的な学習にも焦点を当てていることが推測される。さらに、他の協力者に比べて「リズム」を大切にした読み方を重視しているのは本来の専門が体育であることや、幼稚園或いは児童教育関係の大学・専門学校での指導経験があることに関連しているのかもしれない。

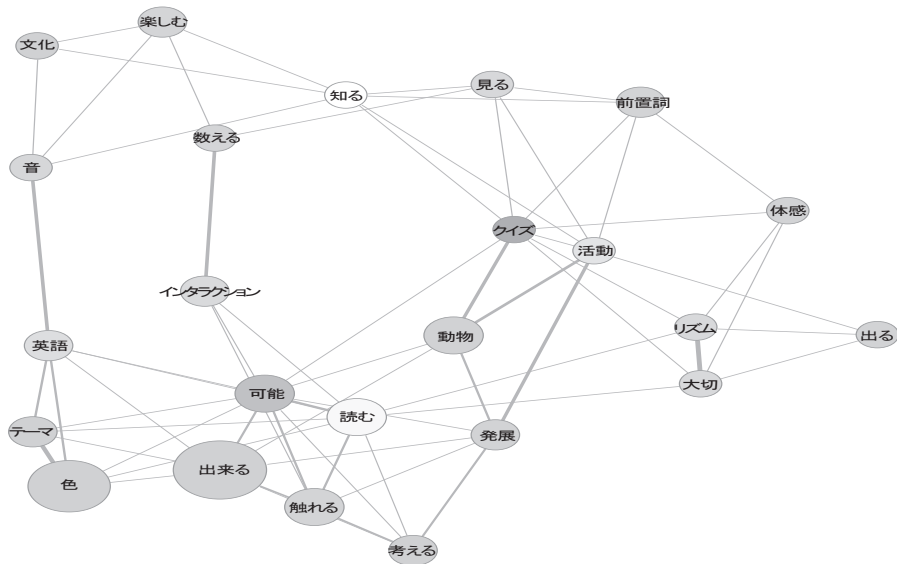


図3 Cさんのコメント

Dさんは、これまでずっと、授業のトピックに合った絵本をできる限り取り込んでいくようにしてきたというだけあって、今回の10冊それぞれに関連付けられる2018年度からの外国語活動・外国語科移行用カリキュラム（文部科学省（2017b）など）の単元例を示していた。例えば，“Today is Monday”（Eric Carle）を選んだ理由を

曜日の名前、食べ物の名前、動物の名前の導入に使用可能。歌もあるので中学年は歌いながら動作を付けTPRでお話を簡単に覚えていく事ができる。Eric Carleの色鮮やかな絵本は子どもたちがまず絵に興味を示す。リズムよく言えるようになればグループでオリジナルの"Today is Monday"を作って紹介するのも楽しい。（単元例：新カリキュラム 3年 Lesson9 Are you a dog? 4年 Lesson 7 What do you want? 5年 Lesson 3 Do you have P.E. on Monday? Lesson 8 What would you like?）

と説明している。そのためか、共起ネットワークはそれぞれ独立したものとなっている（図4）が、

言語そのものだけでなく、子供の学校生活に結び付けており、「外国」の「文化」を「知る」ことも含め「理解」「認識」「解決」といった深い思考を意識していることがわかる。

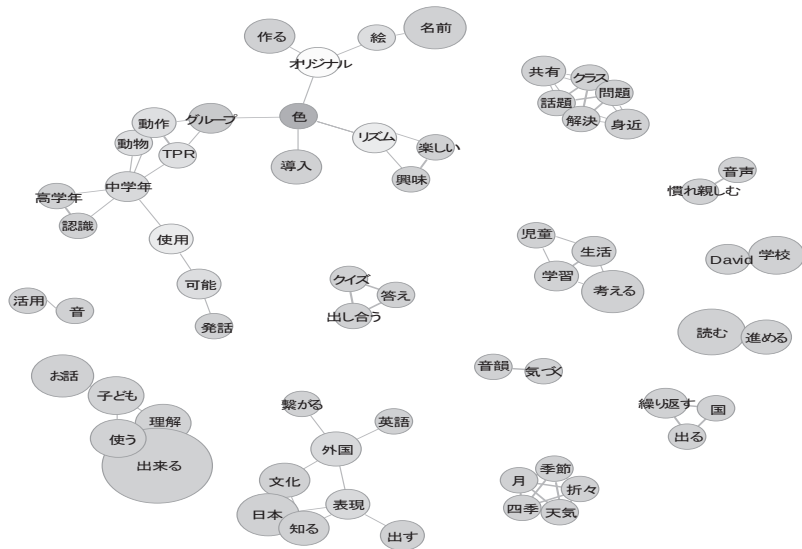


図4 Dさんのコメント

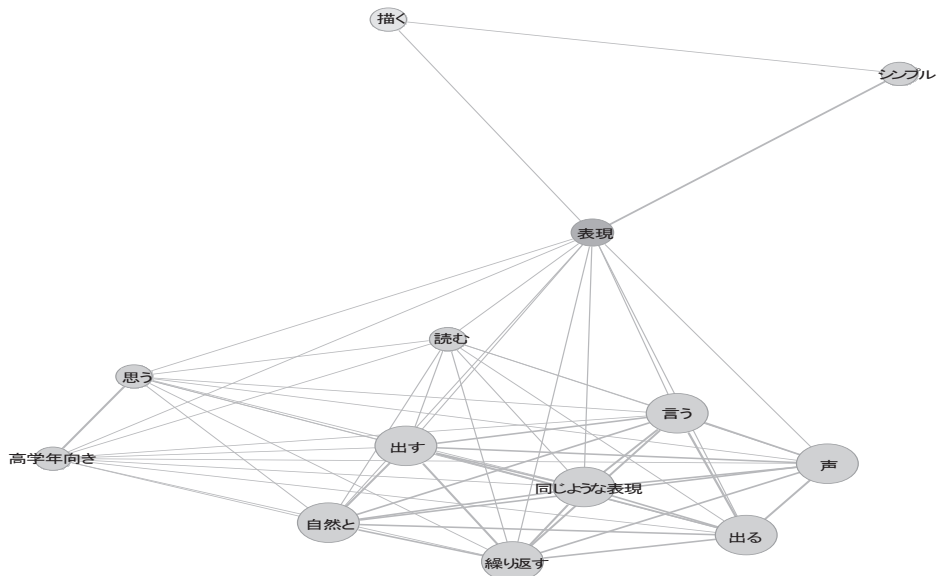


図5 Eさんのコメント

Eさんの回答からは「同じような表現」が「繰り返し」出てくることで「自然と」「声」に「出

して」「言う」ことができる絵本を選択の基準にしていることがはっきり表れている。また、「シンプル」や図5には出てこないが「わかりやすい」という記述もあり、子供たちが理解しやすいということも考慮に入れて選書をしている可能性がある。このことは、絵本を指導に用いる理由として挙げられた「自然な文脈で英語に触れることができ、英語がわからなくても絵という視覚情報から内容を推測できるものだから」という点に一致する。Eさんは小学校では主に高学年を指導していることもあり、学習に困難を感じる子供が多くなる高学年において、過度の負担をかけずに自然な文脈で触れられるオーセンティックな英語を声に出して繰り返すことができるということが絵本を選ぶ観点のひとつになっているものと考えられる。

Fさんは小学校で担任の先生方と協力し、児童の実態を熟慮しながら授業を進めている。「形」や「色」、「意味」、「言語」といった言語学習的な側面にも焦点化しつつ、どの絵本でも一貫して「自分」を見つめ、「考える」きっかけ（機会）としている点は、Fさんが、小学校は人を育てる場であるということを意識しているからではないかと推測される（図6）。トップダウンでインプットを与える道具として絵本を捉えると同時に、文構造にパターンがあれば、論理的なアウトプットを促すことにも使えると考えているFさんであるが、子供たちに「気づき」を促したり、「掘り下げ」たりすることのできる内容こそが重要だと考えていることが結果から推測される。

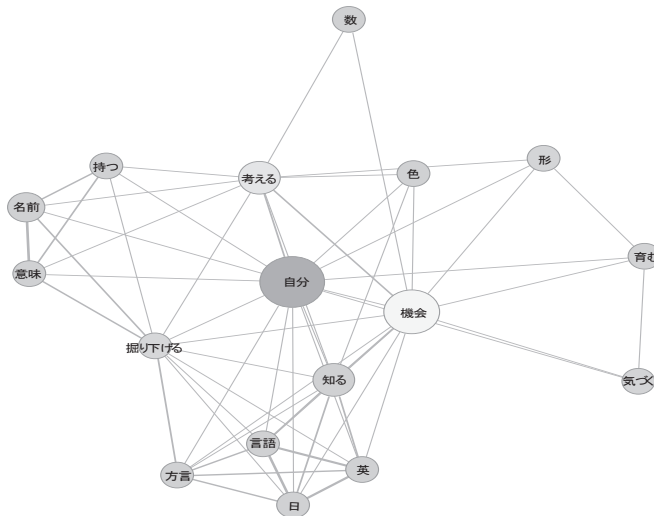


図6 Fさんのコメント

Gさんは絵本を使った指導のセミナー講師を度々行う一方で、多読の指導もしている「読み指導」のエキスパートである。Gさんも「色」や「月（month）」、「動物」、「形容詞」など言語学習の要素も考慮に入れつつ、絵本を通して様々な世界を見せることで子供たちが興味関心を抱くことができるような内容を選んでいることがわかる。また、Fさんと同様「自分」を意識し、「児童」の気持ちを中心に据えている。このことは絵本を使用する理由の一つに挙げられている「共

感したり反発したりといった感情」の動きが起こることにも関連していると考えられる。Gさんはページをめくりながら「次はどうなるのだろう」という期待感を伴ってお話を読み進められることも絵本の良さだととらえており、そのことがネットワークに表れている「導入」「ページ」といったキーワードにつながると考えられる。興味関心を引くところから始まり、子供がワクワクしながらお話の筋を追えるようなものを選んでいなのだろう。

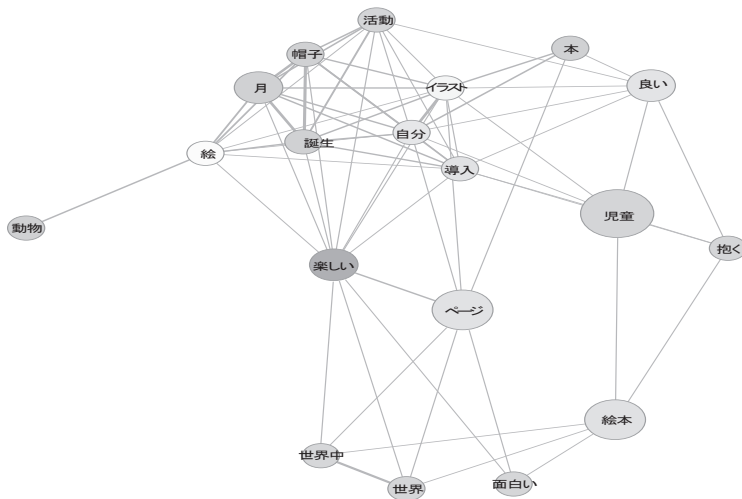


図7 Gさんのコメント

最後にHさんだが、「読み」「進める」「興味」などの言葉が見られることから子供の興味関心を引き出すような題材を絵本選定の要素の一つにしていることが読み取れる。また、「カラフル」であったり、「大きめ」であったりと見た目も重要視している。さらに「シンプル」であることもキーワードであり、ネットワーク上には出てこないが「わかりやすい」「見やすい」「受け入れやすい」といった表現が選定した10作のうち4作の選定理由に見られた。このことは、Hさんが「絵やイラストが手助けとなり、英語を見聞きして『わかった』体験ができ、そのことで自信をつけることができる」と絵本の使用理由について述べていることに関係していると考えられる。長年、教育現場で指導していく中で、子供が興味をもつようなテーマを選び、理解しやすい教材を用いて自信を持たせることが子供にとって何よりも大切と考えていることが読み取れる。

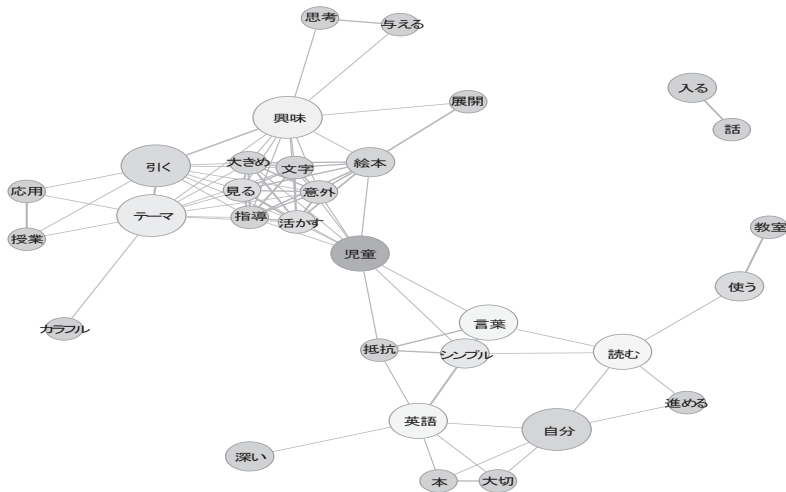


図8 Hさんのコメント

4. 結論と今後の展望

本研究は8名という少ない数での探索的調査であったが、それぞれの指導者によって選ばれた作品にばらつきがあり、8人の指導者から筆者が予想していたよりもはるかに多い62作品が列挙された。本研究ではその中でも複数の指導者に取り上げた12作を中心にテキストの特徴を捉えることを試みたが、語数も40語足らずから300語近くまであり、バリエーションに富んでいた。絵本のトピックによってその理由にばらつきがあるのは当然だと考えられるが共通点も見られる。英語教育の時間に用いられる絵本といえば、Eric Carleの“Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?”が特徴的であるように、「色」「動物」など初学者の子どもが持つ語彙を中心とし、リズムよく一緒に言えそうなものが定番である。しかし、それだけではなく、「自然な文脈で言語に触れる体験をする」などお話自体を楽しみ、「異文化」に触れたり「考え」たり「気づき」たりしながらお話の内容に入り込み、自分に照らし合わせて自分を見つめ、自分の周りにあるものへの理解を深める目的を指導者が持ち、それが達成できるような絵本を選ぼうとしていることが明らかとなった。つまり、言語的側面だけでなく、子供を人間として成長させることが期待できる内容も絵本選定において大切な要素であるということである。

語彙はほぼ1000～2000語レベルでできているものが多かったが、それでも子供たちはすべての語がわかるはずもなく、絵を手掛かりにし、指導者とのやりとり（インタラクション）を通して理解を深める必要があると考えられる。次期学習指導要領で求められているような、目的や場面に合った言語使用を身に付けさせるためにも絵本の活用が有効だと考えられる。教室内でできる場面設定は限られているが、絵本を用いれば、絵本に出てくる様々な言語使用場面に触れ、世界を広げることができる。

今後の展望として、定番と言われる絵本を既に備えている学校に対して、ほかにも小学校英語教育に適した絵本があることを紹介していきたい。そのために例えば、今回は分析方法に使用しなかったが脇本（2017）が英語絵本の有用性を検証するために使用した認知的道具（CTs）を用いて本研究で選定された62作を分析し、様々な指導目的に合った絵本の紹介を試みることも考えられる。また、本研究では、読み聞かせる際のテクニックについては言及しなかったが、今後、読み聞かせの際の指導者－児童間の談話を研究し、どのようなインタラクションをすれば子供たちの発話を促せるのかを示して、現場での指導の一助としたい。

謝辞

多忙の中、本研究に快く協力してくださった8名の方々に深い感謝の意を表します。

〔引用・参考文献〕

- Egan, K. (2005). *An imaginative approach to teaching*. Jossey-Bass A Wiley Company.
- 大川陽子. (2015). 「小学校英語活動における英語絵本の活用に関する研究 一児童の発達段階に応じた英語絵本の活用一」『鳴門教育大学小学校英語研究センター紀要』第5号, pp.31-40.
- 杉本光穂・湯川笑子・森明宏. (2010). 「英語専科教員および担任による絵本読み聞かせ」『小学校英語教育学会紀要』Vol.10, pp.31-36. http://doi.org/10.20597/jesjnl.10.0_31 (2017.10.23閲覧)
- 染谷泰正. (1998). 「AWK による語彙レベル分布計測プログラム Word Level Checker (Ver. 1.5) 簡易マニュアル」http://www.someya-net.com/kamakuranet/wlc/wlc_manual.html (2017.11.1閲覧)
- Someya, Y. (2006). Word Level Checker (WLC). http://someya-net.com/wlc/index_J.html (2017.11.1閲覧)
- 名畑目真吾. (2017). 「小学生向け英語教材の分析における潜在意味解析の利用可能性－Hi, friends! の物語文を題材とした事例－」『共栄大学研究論集』第15号, pp.329-346.
- 樋口耕一. (2014). 『社会調査のための計量テキスト分析 一内容分析の継承と発展を目指して一』ナカニシヤ出版
- 松浦友里・伊東英. (2012). 「小学校外国語活動における英語絵本の導入効果に関する実践研究」『岐阜大学カリキュラム開発研究』Vol. 29, No. 1, pp.94-101.
- 又野陽子. (2014). 「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動における英語の絵本の活用 方法－絵本The Very Hungry Caterpillarを教材として－」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 44, pp.81-90.
- 松本由美. (2015). 「初期英語教育における絵本の有効活用 一児童の自発的反応を引出す「読み聞かせ」の試み一」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』第8号, pp.35-42.
- 文部科学省. (2012). 『Hi, friends! 2 指導編』
- 文部科学省. (2017a). 「小学校学習指導要領解説 外国語科編」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017_11_1.pdf#search=%27%E6%96%B0%E5%AD%A6%E7%BF%92%E6%8C%87%E5%B0

%8E%E8%A6%81%E9%A0%98+%E5%A4%96%E5%9B%BD%E8%AA%9E%E7%A7%91%27 （2017.8.1閲覧）

文部科学省. (2017b). 「第3学年外国語活動活動例〔案・暫定版〕（35コマ）」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/09/08/1395222_001.pdf （2017.9.1閲覧）

山崎友子. (2009). 「英語絵本の選定とその活用：国際理解教育のための英語絵本の開発研究から」『岩手大学英語教育論集』 No. 11, pp. 46-55.

湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春. (2009). 『小学校英語で身につくコミュニケーション能力』. 三省堂.

脇本聡美. (2017). 「英語絵本の中の認知的道具」『神戸常盤大学紀要』 Vol. 10, pp 89-97.

付録（本文で取り上げた作品以外で回答者から挙げられた絵本のタイトル）

“If You’re Happy and You Know It!” Jane Cabrera (Holiday House)

“THE QUEEN’S PRESENT” Steve Antony (HODDER CHILDREN’S BOOKS)

“A Cheese Tomato Spider” Nick Sharratt (Scholastic Hippo)

“Teddy Bear” Mikiko Nakamoto (Apricot)

“Bears in the Night” Stan Berenstain (HarperCollins)

“David Goes to School” David Shannon (Blue Sky Pr)

“Ella Sarah Gets Dressed” Margaret Chodos-Irvine (HMH Books for Young Readers)

“Fortunately” Remy Charlip (Aladdin)

“From Head to Toe” Eric Carle (HarperCollins)

“Growing Vegetable Soup” Lois Ehlert (HMH Books for Young Readers)

“Handa’s Surprise” Eileen Browne (Candlewick)

“Harold’s ABC” Crockett Johnson (HarperCollins)

“HELLO!” Betsey Chessen, Samantha Berger (SHOLASTIC)

“Hello, Red Fox” Eric Carle (Aladdin)

“Here comes Jack Forest” Kazuno Kohara (Square Fish)

“I’m a seed” Jean Marzollo (Cartwheel Books)

“I LIKE ME!” Nancy Carlson (Puffin Books)

“I’m the Biggest Thing in the OCEAN” Kevin Sherry (RAGGED BEARS)

“In a People house” Dr. Seuss (Random House Books for Young Readers)

“It’s OK to be Different” Todd Parr (Little, Brown Books for Young Readers)

“LEMONS ARE NOT RED” Laura Vaccaro Seeger (Roaring Brook Press)

“Life is Fun” Nancy Carlson (Carolrhoda Books)

“Little blue and little yellow” Leo Leoni (Dragonfly Books)

“Mixed up Chameleon” Eric Carle (Puffin)

- “My Cat Likes to Hide in Boxes” Eve Sutton, Lynley Dodd（絵）（Puffin）
- “My Five Senses” Alike（HarperCollins）
- “Our Sweet Home” Mikiko Nakamoto（Apricot）
- “Peanut butter and jelly” Nadine Bernard Westcott（Puffin books）
- “Pete the Cat I Love My White Shoes” Eric Litwin, James Dean（HarperCollins）
- “Polar bear, polar bear, what do you hear?” Eric Carle（Puffin）
- “Skip through the Seasons” Stella Blackstone, Maria Carluccio（Barefoot Books）
- “Slowly, slowly, slowly, Said the Sloth” Eric Carle（Puffin）
- “THE BIG, BIGGER, BIGGEST BOOK” SAMi（blue apple books）
- “The Giving Tree” Shel Silverstein（HarperCollins）
- “The Cat in the Hat / Hop on Pop” Dr. Seuss（Random House Books for Young Readers）
- “The Little Old Lady Who Was Not Afraid of Anything” Linda Williams, Megan Lloyd（絵）
- “The Name Jar” Yangsook Choi（Dragonfly Books）
- “The Secret Birthday Message” Eric Carle（HarperCollins）
- “The stray Dog” Marc Simont（HarperCollins）
- “Twelve Hats for Lena – A Book of Months” Karen Katz（Margaret K. McElderry Books）
- “We are going on a Bear Hunt” Michael Rosen, Helen Oxenbury（Walker Books Ltd）
- “What can a hippopotamus be?” Mike Thaler, Robert Grossman（絵）（偕成社）
- “What's this?” Mikiko Nakamoto（Apricot）
- “When Sophie Gets Angry- Really, Really Angry…” Molly Bang（Scholastic）
- “Where's Spot?” Eric Hill（Frederick Warne Publishers Ltd）
- “White Rabbit's Color” Alan Baker（Kingfisher）
- “Who's Behind Me?” Toshio Fukuda（RIC Publications）
- “Why?” Nikolai Popov（Minedition）
- “Yellow Is My Color Star” Judy Horacek（BEACH LANE BOOKS）
- “Zero” Kathryn Otoshi（Ko Kids Books）

（おさだえり 國學院大學人間開発学部初等教育学科准教授）